酔っぱらいのパンクスが、さっきからずっと、ステージ前にかぶりついている。

「いいぞー」「ちゃんと演れよ!」

連中のヤジに、YUKIはだんだん嫌気がさしていた。

ミニスカートの裾を翻してコケティッシュに歌うYUKIに、冷やかしの声が飛ぶ。卑しい視線に、だんだん恥ずかしくなってくる……。

事件が起こったのは、そのときだった。

(イントロのコード、いつもと違う。どうしよう、音がとれないよ)

ギターの音に次いでア・カペラで始まる「BLUE TEARS」の歌い出しが、どうしてもうまくいかない。声がふらつく。

音が、止まった。TAKUYAのほうを見れば、演奏をやり直そうとしている。彼の曖昧な笑みに、YUKIも困ったような笑いを見せた。

「おいおい、どうしちゃったの~?」

すかさず飛んでくるヤジに、スンマセ~ンというふうなことを言ってYUKIはやり過ごした。

(今日は最悪だ!)

しかし、ライブは最後までやりきった。そう、YUKIは思っていた。

少なくとも楽屋へ引き上げるまでの間は。

「ったく、笑ってんじゃねえよ!!」

狭い楽屋の通路、五十嵐の怒鳴り声が響く。

(えっ、何? 公太さん、どうしたの?)

慌てて振り返ると、やはりTAKUYAも冗談か何かだと思っているのだろう、笑っていた。しかし、五十嵐も恩田も、スタッフも、誰もが皆、この夜のライブにやりきれない怒りを感じていたのである。

「オマエら、ホントにわかってんのか? こんなんじゃあ、プロになれない! これじゃあ、うちの事務所が恥ずかしいよ! こんなバンドをデビューさせることが本当に恥ずかしい」

これまで怒った顔など一度も見せたことのないプロデューサーの成瀬の様子に、YUKIは恐れを感じるどころか呆気にとられていた。

(……なんでナルセさんまでこんなに怒ってるの……?)

小さな楽屋とはいえ新人バンドに個室を与えてもらえるなんて、まったくあたしたちは恵まれている、これもスタッフのおかげなんだな、と今日ここに入ったときに感じていたことを、YUKIは思い出していた。

そういえば、あんまり天気がいいからってこの窓を開け放ったまんまステージに出ていったっけ……。

澱んだ部屋の空気を浄化するように、夏の夜風が入ってくる。

しかし五十嵐は、YUKIたちのほうに背を向けたまま、怒りを吐き出すようにひとり煙草を吹かしている。

成瀬の怒りは鎮まりそうにもない。

いつもなら間に入り、事態が沈静化するように事を運んでくるマネージャーの堀江でさえ、腕を組んだまま口を閉ざしている。

(演奏が止まって、笑ってたことかな……?)

怒りの原因を突き止めるため、YUKIはYUKIなりに考えを巡らしたが、それは見当違いだった。

ファミリー・レストランに場所を移し、ミーティングは夜更けまで続いた。

プロとしてライブをやるということがいったいどういうものなのか、オマエらまるでわかっていない、と五十嵐に諭された。

毅然としろ。どんなときにも自分たちの音楽をちゃんと聴かせる、客を奪ってやるぐらいの気合いがなくてどうするんだ、と。

「マネジ、あたし、まるでわかってなかったね」

帰り道、しょんぼり肩を落としているYUKIに、堀江が言った。

「YUKIちゃん、今日のYUKIちゃんは前のパンクスしか見ないで演ってたでしょう。でもさ、このクラブチッタって広いんだよ。後ろまでお客さんがいるんだよ? それなのに前のほうでしか演ってなかった」

そうだったのか、と、YUKIは思う。

(あたし、あのときヘグリさんに言われたこと、忘れかけていたのかもしれない)

インディーズ時代、原宿ルイードでJUDY AND MARYのライブを観た当時の事務所社長、平郡泰典はYUKIにこう言ったのである。

「YUKIちゃんのその二の腕と、あと目線が良かった。小さいステージで演っているのに、すごく広い所で演ってるみたいに歌ってたね」

「あの、でもヘグリさん、あたしはそんなんじゃなかったんです。お客さんほとんど入ってないし、歌ってても見るところないから、だから遠くを見て歌ってただけなんです」

本当にそうだった。何も考えず、歌っていただけだ。けれども、率直にそう告げる彼女に、平郡は夢のような言葉をかけてくれたのだ。

「でもね、それがすごく良かった。未来が見えたんだよね」

未来が見えた——そんなうれしい言葉も、バンドの可能性に賭けてここまで支えてきてくれたスタッフの気持ちまでも、裏切るようなライブを観せてしまった。YUKIはくちびるを嚙みしめた。

もう甘っちょろいものは観せられない。

気合いの入ってないライブなんかやらない。

誰にも媚びない。絶対に退かない。負けない。そう心に決めた。

スタッフを失望させたそのライブから、10日と経っていなかった。

8月12日、YUKIたちは中西圭三の前座として”りんくうフェスティバル”に出演する。初の野外イベント、抜けるような空のもと、だだっ広い敷地に集まったお客さんの数は、実に8,000人に及んでいた。

「皆さま、”りんくうフェスティバル”へようこそお越しくださいました。本日は、9月22日<POWER OF LOVE>でエピック・ソニーよりデビューします、JUDY AND MARYの演奏からお聴きください」

生真面目なアナウンスに、ステージの裾で笑い転げる４人。

客席の様子に耳を傾けるが、反応はまるでない。

「ママー」「あ、風船が飛んでったー」といった子供の声が聞こえてくるだけだ。実にのんびりしている。

「今日は初めての野外だし、8,000人、気持ちよく演ろう」

ライブを始める前の、気合い入れ。

差し出した手に手を重ね、４人で円陣を組んで恩田の言葉に頷く。

「YUKIちゃん、最近たまに自信なさそうなときがあるけど、YUKIちゃんはいちばん最初に演った鹿鳴館のころ、もっと違ったよ。”客、奪ったる!” ”関係ねぇ!”みたいな感じで演ってたよ」

「うん。わかった」

「よし、じゃあお客さんはみんな俺たちのことは知らないんだから、曲をちゃんと聴かせて、とにかくこっちを見させる。ひとりでもふたりでもいいから、連れていく! 気合い入れて演ろう!!」

「おう!!」

JUDY AND MARYのライブのオープニング・テーマ「GLAMOUR PUNKS」が流れるなか、五十嵐、TAKUYA、恩田に続き、青いタンクトップに白いスカート、厚底の白いスニーカーでYUKIはステージへ飛び出していった。

目の前には、どこまでも人がいる。しかもみんな、体育座り。

大音量で演奏は始まっているのに、空気はくつろいでいる。

YUKIはなんだか楽しくなってしまった。

気持ちいいくらいに自分の歌がうたえている。

夕暮れの近づいた美しい空の模様を眺めながら「BLUE TEARS」を歌い始めたとき、YUKIはそれまでにない感覚にとらわれた。

なぜか無性に、じぃんときたのだ。歌っている自分が、自分の歌に感じ入る。こんなことは、初めてだった。

しかも、どうやらそれは自分だけではないということに気づく。

(お客さんが歌を聴いてくれてる。聴いてくれてるよ!)

歓声や手拍子といったサインは何もないけれど、YUKIにはそれがはっきりとわかった。演奏を始めたころは、明らかに空気が違うのだ。

最後の曲を始めたときだった。いちばん前で観ていた女の子３人が、立ち上がってくれるのが見えた。拍手をしてくれているのがわかる。

(やった! すごいよ、立ってくれてるよ——!)

(素晴らしいライブだ、これはベストワン・ライブだ!)

まだ数えるほどしかライブをやっていないというのに、すべてのメニューを終えると同時に、YUKIはもうそう思っていた。興奮していた。

「ドラム五十嵐公太、ギターTAKUYA、ベース恩田快人、歌ってるYUKIです。JUDY AND MARY、よろしくお願いします!」

そう言ってステージを降りようとしたときである。

「ユキちゃーん!」

見れば、風船が3つ、空のなかで揺れている。

あの女の子たちが、風船を握りしめた手を大きく振りながら、自分の名を呼んでくれているのだ。

「ユキちゃ——ん!!」

昨日まで知らなかったはずの名前を、今こうして大声で呼んでくれている。これまでに感じたことのない喜びを、YUKIは覚え始めていた。